中世禅宗寺院
越前善応寺について(三)

池田正男

五章　善応寺に関わる禅僧

①別源円旨

善応寺の開山である別源の出自からみてみる。「弘祥寺由来書」[*15]によれば

（上略）

右薬師如来ハ、開山別源和尚守護本尊、春日之作ニシテ霊験之秘仏也。夫別源和尚者当国人片上平氏、父ヲ観智ト云イ母ヲ妙性ト号ス。父母、子無キ事ヲ歎キ給ヒ、此薬師如来江祈誓シ給フニ、夢想あらたかに明珠ヲ□江給フト見テ覚テ後懐妊シ、則禅師ヲ誕生シ給フニ、聡明霊利出格抜群ニシテ、七歳ニテ童行ト成リ、二十七歳ニシテ入唐シ、帰朝之後、父母ノ家ヲ寺トナシ、父母ノ名ヲ取テ寺ニ名付、妙観寺ト号スト也。ムカシヨリ此如来ヲ身ヲ放タス所持シ、則当寺ノ本尊ト成シ給フ。（中略）

文政十三庚寅年四月

足羽郡寺下村　弘祥寺　印

とあり、別源の出自は片上平氏であり、父母の家を妙観寺としたとある。この寺の所在地は片上（鯖江市）となろう。

『越前人物志』[*16]は別源の出自を「足羽郡片上村平氏」としているが、この資料を引用したものであろうか。

しかし『大日本史料』[*17]には肥後の合志家系図を載せている。

合志家系図源姓佐々木氏

時長　次郎右衛門　法名道念

長綱
時綱　佐々木左衛門尉、
別源和尚　諱円旨、於越前出家、
住久米壽勝寺、
了快阿闍梨　住南都無動寺、

また『姓氏家系大辞典』の合志（カハシ）の条では、

肥後国志に「佐々木四郎左衛門尉長綱、大友氏の裁許により当国に下向し、合志半国の地頭職となり真木村に居住し、氏を合志と号す。」

とあり、長綱は延暦寺の寺領奉行を足掛りに肥後へ進出したものらしい。また別源の出は、平氏と源氏の二説があり、この喰い違いは当時から佐々木氏の出自には諸説があったことを反映したものであろうか。

以上のように別源の出自については不明確な点が残る。今後の課題としたい。

次いで別源の足跡をたどってみたい。別源の渡元前の円覚寺白雲庵での修業時代以来の朋友である中巌円月が撰した「洞春庵別源禅師定光塔銘」によれば

師諱円旨、字別源、自称縦性、越州平氏之子、母以無子、懇禱之薬師仏、一夕夢呑明珠、乃有身、既産無悩、寛永仁二年歳次甲午冬十月二十四日也、師七歳、随父詣府之帆山寺、瞻礼観音像、甚喜、又見寺僧、忻然如素馴従者、帰家白父母求出家、以為夙縁、乃随其志、依仏種寺竹庵圭和尚作童行、十六歳、薙髪登具、一日圭謂師云、観尓根器、不当久滞村院、我聞東明和尚、近従元朝来、洞上宗風、盛行関東、宣往礼拝、師受教趣装而行、時明主円覚、一見許入室、執侍十二年、師資契合、元応二年庚申、師二十七歳、乗商舶往江南、参訪諸老、鳳台古林、天童雲外、（中略）南遊凡十有一年、元朝至順庚午回郷、（以下つづく）

府中の帆山寺に参詣し、その後、出家し、仏種寺に童僧として入ったと記されている。因みに現在、仏種寺は南条郡河野村大良にあり、由緒によれば天文（1534）三年に真言宗から法華宗に改宗したとされるが[*18]、別源との関わりについては不明である。その後、曹洞宗宏智派の東明慧日が来日し、鎌倉の円覚寺の住持であったところへ入門を許され、師について十二年間修業した後、元応（1320）二年二十七才で元国に渡り修業し、元徳（1330）二年に帰国した。

円覚任後版、秉拂提綱、緇素驚歎、無幾、遷居建長前板、暦応三年冬十月四日、東明臨終問侍僧、（中略）康永元年、帰越足羽県、朝倉金吾、開弘祥寺基、為第一世、住未幾、赴鎮西寿勝請、明年、券席帰弘祥、亦有信士、創善応、吉祥二寺、請師為開山、文和三年、東陵和尚住南禅、招師分座、駿州清見無主、請師、固辞不就、延文二年、幕府有帖、匡京之真如、明年秋、以脚疾退帰越、貞治三年六月、建仁公命至、以疾拒之、越之太守、擯掇令就、又佐々木判官、為禅律二教総管、馳書縦叟、迫不獲已、承公命、力疾匡徒、不倦槌拂、秋九月、重陽上堂、顧左右、作偈曰、（中略）冬十月朔、征夷大将軍、遣使問病次、降官符、陞弘祥寺、位列諸山、以貴師行道之蹟也、八日、就建仁東辺、築塔基、構庵宇、名洞春、晩間舁到塔所、（中略）臘五十四、寿七十一、

そして別源は帰国後には鎌倉の円覚寺、建長寺の首座に任じられた。また師に当たる東明慧日の臨終に当たり末期の問答を遂げた。

康永元年（1342）に越前に帰り弘祥寺（福井市金屋町）を興し、次いで鎮西寿勝寺に赴き、翌年には越前に戻り善応寺、吉祥寺を創立した。

善応寺と吉祥寺については八章の「善応寺の所在地と吉祥寺について」で考察をしてみたい。

文和三年（1354）に東明の法嗣で元国から来日した東陵永興が南禅寺に住した時、招かれて東陵を助けた。別源が東陵に招かれた折、越前善応寺の可休亭で詠んだ詩が著名である。この詩については六章の「善応寺と文芸活動」で取り上げる。

別源は在元中に大いに語学力を付けたものとみられ、別源の在元中の詩文集である南遊集の後題には、新羅人と間違われる程、中国語が達者であったとほめたたえられたと書かれている。[*19] 元国で知己を得ていたとは言え、語学力が買われたことも招かれた理由の一つであったであろう。

延文二年（1357）に山城の十刹真如寺に入寺したが、脚疾により越前に帰る。貞治三年（1364）六月に五山の建仁寺の公帖を受け、一旦は病を理由に固辞したが、越前守護の斯波氏や幕府禅律方の佐々木氏のたっての勧めにより、九月に上京し建仁寺に入寺した。前述のように別源の出自が佐々木氏であるとすれば、同族のよしみで断わりきれなかったものと考えられる。

ここで浅学の筆者は「越之太守」を当時の越前国守護である斯波氏と理解したが、『五山禅僧伝記集成』[*20]の別源の項では「檀那朝倉氏」としている。付記しておく。

その後、幾ばくもなく病を得、足利義詮は十月一日に使いを遣わして慰問すると共に、弘祥寺に諸山位を与えた。八日、建仁寺の東辺に塔を築き洞春庵を構えたのを見届け、当夜に建仁寺で示寂した。寿齢七十一歳であった。ちなみに別源の自賛頂相の幅が弘祥寺の寺宝を受け継いでいる大安寺に残されている。[*21]

②玉岡如金

次いで善応寺の中興である玉岡を取り上げてみる。『扶桑五山記』[*22]によれば

山城州東山建仁禅寺
（上略）
曹洞派
洞春庵　別源禾上、塔曰定光、
雲龍庵　月蓬禾上、
新豊庵　玉岡禾上、
（中略）
六十一、玉岡和上、諱如金、嗣別源、塔于新豊庵、越前人、応永九年壬午八月二十六日寂、頌曰、七十一年、討甚麼椀、古渡月明、青天雲散。
霊亀山天竜資聖禅寺
（中略）
二十八、玉崗禾上、諱如金、嗣別源、越前州人、応永九年壬午八月二十六日寂、寿七十一、塔曰新豊、建仁六十一世。

とある。玉岡は別源に法を嗣ぎ、建仁寺に新豊庵を興し、別源の興した洞春庵、月蓬の興した雲龍庵と共に宏智派の京都の活動拠点となっていた。そして建仁寺の六十一世の住持となり、また天竜寺の二十八世の住持となる。

『月舟和尚語録』の「東山八住語録」には

前住当山大成入祖堂
（上略）
超越曩時四十五歲、値善応中興開基玉岡和尚一百年忌辰、一衆胥議、聞諸相府、挙師出世、（下略）

「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」に

翌日中興開基清華祖塔香語
重陽後一日、善応新住持寿桂、謹率闔衆、
至中興開基清華塔下、賦焼香偈、以供定
中一笑云。

清華は玉岡の塔名である。よって善応寺には別源の開山塔の他に、玉岡の中興開基塔もあったようである。玉岡は善応寺の中興の祖であり、善応寺を準甲刹（準諸山）にした。

また「重続日域洞上諸祖伝」[*23]に

天竜寺玉岡金禅師伝
師諱如金、号玉岡、越前望族也、（中略）
師以応永九年八月二十六日寂于善応寝室、
辞世偈曰、七十一年、討甚麼椀、古渡月
明、青天雲散、塔在東山、曰新豊、嗣其
法者、従中證悦堂□也。

とあり、そして応永九年（1402）に善応寺で示寂した。寿齢七十一歳であった。

③竺源知裔

善応寺の諸山位の獲得で活躍した竺源を取り上げる。『蔭涼軒日録』には

文明十六年（1484）八月十九日
午後、真如寺住持裔竺源来、於東向寮有
宴。

とあり、竺源知裔の初出である。残念ながら日録はこれ以前の二十ケ年の記録を欠いており、この時点より遡ってはたどれない。当記述によれば竺源は当時、十刹真如寺の住持を務めていた。そして蔭涼軒主である亀泉集証とは親密な関係であったらしく、当日は亀泉の蔭涼職着任の翌日にあたり、宴に招かれている。これ以降、亀泉の示寂までの十一年間に渡り、日録に約六十箇所に竺源あるいは善応老人として頻出する。

また竺源の行動範囲は広く、亀泉とのパイプを活用したものか、禅僧の任官にも多く携わっていたようである。善応寺の諸山位獲得も、こうした人脈により成功させたものとみられる。

次に、竺源の足跡をたどるために『蔭涼軒日録』から竺源自身の僧位や、居所に関するものなどを抜き書きしてみる。

文明16・08・19　真如寺住持裔竺源
（竺源の初出）
08・20　善応老人（善応老人の初出）
11・19　洞春院知裔西堂
～
18・06・06　洞春院竺源西堂
19・04・17　善応寺住持竺源西堂
長享02・03・05　建仁寺内智裔西堂
（掛絡を贈られた記事であり、建仁寺での所在を意味しない）
04・16　竺源西堂自善応寺入洛
12・28　洞春院主竺源西堂
～
03・02・11　洞春竺源西堂
07・16　洞春庵竺源西堂自伊州帰洛
延徳01・10・24　洞春院竺源西堂、就善応寺諸山事、為鹿苑一覧渡之
02・12・02　智裔西堂建仁寺公帖
03・02・06　洞春院竺源和尚
～
03・10・26　洞春院々主裔竺源和尚当院住持来一二月期満、含蔵寺以順番老僧当住持也
明応01・10・04　洞春院竺源和尚自越前上洛
02・03・16　竺源和尚建仁入寺（再住）
04・17　建仁当住竺源和尚諱知裔
07・16　建仁寺竺源東堂今夏住持無為退院（竺源の最終出）

07・27　善応老人（善応老人の最終出）

08・06・09　洞春庵竺源和尚請南禅公帖（鹿苑日録）

竺源の足跡を整理してみる。

竺源が真如寺へ入寺した頃、既に善応老[*24]人と記されており、竺源は善応寺の出身で、善応寺の実力者であったとみられる。また在京中は洞春庵を居所としていたことが知られる。

因みに通例では諸山の公帖を得て法諱、即ち知裔西堂を名乗り、十刹の公帖を得て道号、即ち竺源西堂を名乗るのである。よって十刹真如寺の公帖を得た時点から竺源西堂と名乗る訳だが、日録ではこの使い分けが曖昧になっている。

その後、文明十九年頃には善応寺の住持を務めており、長享二年四月に上洛している。日録の出現記事からみて、この折の善応寺での居住期間は二年弱であったろうか。

同年十二月には洞春院々主の初出であり、上京後は洞春院々主を務めたものとみられる。

その後、長享三年七月には伊予から帰洛しており、五ケ月間程京を離れていたようだ。

延徳元年には洞春庵にあって、善応寺の諸山位獲得に成功している。

延徳二年十二月に五山建仁寺の公帖を得ており、その後は竺源和尚と記されている。後で建仁寺の入院について考察するが、この時は入院は遂げなかったものと考えられる。

延徳三年十月には洞春庵の院主が満期となって、含蔵寺の住持に就こうとしたが果たせなかった。しかしこの後一年間は日録に登場していない。そして明応元年十月に洞春竺源和尚自越前上洛とあるから、どうやら越前に戻っていたようだが、越前の何処に居住していたのかは不明である。

明応二年三月十六日に建仁寺への再住の公帖を得ており、同年七月に初めて竺源東堂との記述がある。再住の公帖を得てから入院するのが通例であったようであり、この時、晴れて建仁寺への入院を遂げ、黄衣を着け、東堂（前住が入る室の意）位へ昇ったものと考えられる。また「今夏住持無為退院」とあり、再住を無事勤め上げている。

そして七月を最後として記述がみられなくなる。『蔭涼軒日録』の記述者である亀泉は体調をくずしていたようで、九月二十三日が擱筆となっている。（亀泉の示寂は二十七日）

建仁寺への入寺に関して『扶桑五山記』の建仁寺の条によれば

二百三十三世、竺源　裔、三住、同年十（延徳二年）二月、不入院、別源派

とあり建仁寺に三住している。しかし建仁寺の三住目については日録からは解明できない。

鹿苑日録の明応八年六月には南禅寺の公帖を望んでいる記述がみられるが、公帖を得たのか、入院を遂げたかは明らかではない。またこの時にも洞春庵に住していたことが判る。

その後については「幻雲詩稿第二[*25]」に「寓含蔵寺竺源老人韵」があるところをみれば、かねて望んでいた含蔵寺に住したようであるが、終焉については詳らかではない。

ちなみに『福井市史　資料編2』では「大乗院寺社雑事記」を取り上げ、含蔵寺の所在地について一乗谷近くの安波賀（福井市）とみられる資料を挙げている。所在場所は不明である。[*26]

④春岳契東

『蔭涼軒日録』には

延徳二年閏八月二日[1490]

契東首座字雲岳、越前国善応寺入寺公帖望之、善応寺者去年始列甲刹位、入寺始也、謝語写之置之。

とあり、雲岳は春岳の誤記であろう。さらに

同九日

自院新住持書立有之、書立云。（中略）

越前国善応寺入寺契東首座。越前国日円寺入寺徳巴首座。（中略）

延徳二年閏八月九日　　景文　判

鹿苑院

同二十八日

契東首座越前善応寺入寺公帖、彼代渡之、持以一纒。

とあり、善応寺の公帖を得た。「幻雲稿」には

春岳東首座住越之前州善応山門　有序

越州路瑞聖山善応禅寺

（中略）

遂挙建仁第一座春岳東公禅師住持本寺、闔衆歓呼曰、禅師産吾郷、而主于吾山、

（下略）

とあり、春岳は善応寺の近在で生まれ、当寺の出身であったようである。そして善応寺の首座となり、後に建仁寺の第一座になったようである。『蔭涼軒日録』には

明応二年四月十六日[1493]

自大昌院吹嘘状来、蓋契東西堂越前国弘祥寺入院公帖事、可預登用、及今月三十三ケ月也、一両月之事者可預御意得。

とあり、十刹となっていた弘祥寺への公帖を約三年間待たされたようである。そして「幻雲文集」[*27]には

春岳和尚肖像

（上略）応機則唱拍相隨、陞瑞聖初歯諸山、栄中釣選、入大冶以闢丈室、整頓叢規、（中略）洞春新豊両祖的裔、前住善応後住弘祥春岳禅師也。

とあり、弘祥寺への入寺を果たした。しかし春岳の終焉については詳らかではない。

⑤東林如春

「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」には

前住当山後住建長東林和尚入祖堂

（上略）

師越州人也、恂々不言、研精芸苑、学松雪書、咄咄逼真、壮年居洛東山、以任書記、中年従国信使九淵師、観光中華、御史張楷作詩唱和、触書之名、振于中朝、天使降詔、書鴻臚卿寺之額、師泚頴而退、詔命不允、輝毫応之、観者絶倒、頗被聖眷、（中略）

晩年還此山、開軒号如意、実蒐裘地也。

延徳三年辛亥、二月二十五日、書遺偈而化、（下略）

とある。東林は越前に住していたが、壮年になってから建仁寺の書記となった。その後、明国に渡り書法に秀でていたためであろうか、鴻臚卿寺の寺額を揮毫し、能書家として名を上げた。帰国の後も建仁寺に住し、弘祥寺の住持にもなった。

玉村竹二氏は『五山禅僧伝記集成』[*28]東林如春の項で「晩年は建仁寺にあり、洞春庵内に如意軒を構えて閑棲した」とある。確かに『蔭涼軒日録』の十月十九日の条には

遣契庵主於洞春院、々々末寺越前善応寺甲刹之事、賜一行、鹿苑可相議定、云々。

又東林和尚南禅寺公帖事、可被相尋事、両條督之、返答丁寧。

とあり、延徳元年の頃は洞春庵にあり、善応寺の諸山位獲得の運動にも参画していたと考えられる。しかし筆者は「前住当山後住建長東林和尚入祖堂」が「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」の中にあることから、当山及び此山とは善応寺を指すと考える。さらに晩年に此山に還るとの記述があること、また文中の蒐裘（ときゆう）とは革衣の原料の葛のことであるが、隠居の地の意ともなることなどを推し量り、東林は善応寺に如意軒を開いたと考える。

そして延徳三年二月二十五日に善応寺で示寂したとしたい。また晩年此山に還るとあることから、あるいは建仁寺に上る前は善応寺に住していたと考えられる。

話は前後するが、善応寺の諸山位獲得運動時に東林は南禅寺への公帖を得ようとしているが、これは果たせなかったようである。

法嗣は善応寺との関わりが深い驢雪鷹瀟と長松乗彭である。

⑥月舟寿桂

この章では曹洞宗宏智派の善応寺と関わりがある僧を取り上げており、月舟を除いては同派に属する僧ばかりである。しかし月舟は臨済宗幻住派ではあるが、月舟の師が曹洞の宗旨をも学んだ人であったことから、月舟も宏智派の人達と混じって行動したのが縁で、朝倉氏は月舟を同系として扱ったのである。

『月舟和尚語録』の「月舟和尚住越前州安居太冶山弘祥禅寺語録」[*29]には

師於永昌（正）六年（1509）六月十八日、在越之前州一乗宝応寺受太守請、二十三日入寺、

とあり、朝倉貞景の要請で永正六年六月に弘祥寺に入寺した。また『扶桑五山記』の建仁寺の条によれば

二百四十六世、月舟寿桂、二十五住、（永正）同七年三月五日、

とあり、永正七年（1510）に建仁寺に入寺し二十五住した。この間、十二住の後、越前に下った模様であり、善応寺への入寺があったとみられる。即ち、「幻雲稿」によると

仙雲巣住弘祥同門、以下天文元年、竊以、永正六年六月二十三日、予応越之太守天沢居士命、滌吊大冶山弘祥禅寺、蓋攀先例也。十五年重陽、今太守又降命住善応寺。（下略）

とある。また「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」の「前住善応大成和尚入祖堂法語」と「前住当山後住建長東林和尚入祖堂」にも永正十五年（1518）九月の記述があり、また重陽入寺ともあり、月舟の善応寺入寺は永正十五年の重陽の節句[*30]、つまり九月九日であり、退院九月二十四日とあり、同年同月の退院とみられる。よって善応寺の滞在はわずか半月足らずの期間であったとみられる。法嗣には朝倉氏家臣魚住氏の養子である継天寿戩がいる[*31]。

⑦大成集

『蔭涼軒日録』の延徳二年（1490）十月十九日の条には

自越前善応寺新住持有状、副以一繦、集首座来。

とあり、善応寺新住持とは、この頃、当寺の公帖を得た春岳のことと思われ、大成集は洞春庵に住していたと考えられる。

「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」に

前住善応大成和尚入祖堂法語
（上略）
蓋前住当山二十二代大成和尚大禅師、
（下略）

とあり、大成は次々資料にもあるように善応

寺中興開基玉岡和尚一百年忌にあたる文亀[1501]元年に善応寺の第二十二代住持となったことが判る。さらに『扶桑五山記』の建仁寺の条によれば

二百四十九世、大成、集、曹洞、三住、同九年八月十八、（永正）[1513]十年九月二十三、

とあり、月舟の建仁寺在住の期間と重なっており、同時期に活躍したものとみられる。また『月舟和尚語録』の「東山八住語録」に

前住当山大成和尚入祖堂
（上略）
夫禅師越州府人也、自幼居州之善応精舎、天資俊発、咸謂池中物、二十五歳、入洛隷名于吾東山、以司蔵鑰、朝磨夕礪、従師学道、（中略）
超越曩時四十五歳、値善応中興開基玉岡文亀辛酉年
和尚一百年忌辰、一衆胥議、聞諸相府、挙師出世、（中略）
八月二十一日、親書遺偈云、（下略）

とあり、府中の生まれであり、幼き時から善応寺で修業したことがわかる。また「建仁寺住持位次簿」には

二百三十九世大成和尚、名集、嗣文渓才、永正九年壬申八月十八日入寺、同十二年乙亥八月二十一日、寂越前善応寺。

とあり、永正十二年[1515]八月二十一日に善応寺で示寂した。

⑧廉甫如泉

「幻雲稿」には

廉甫泉公座元住越州善応山門
（以下略）

とあり、廉甫は善応寺に住していたようである。また『扶桑五山記』の建仁寺の条では

二百五十六世、廉甫　泉、曹洞、（永正十一年）同年、

とあり、永正十一年[1514]に建仁寺の住持となっている。

⑨驢雪鷹灝

驢雪は東林の法嗣であるが、「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」によれば、月舟の善応寺の入寺に際し、驢雪は山門疎を撰し、侍香を拈じている。[*32]

さらに『鹿苑日録』には

天文五年[1536]六月六日
鷹灝西堂建仁可入院志在之、自越上之。
同十四日
驢庵（雷カ）鷹灝西堂建仁之公文礼百疋来、侍衣報之、官資十五緡、公府江納之、向後者五山者弐十緡、甲刹五緡相定云々。

とあり、驢雪は建仁寺への公帖を得ようと鹿苑院に運動し、官資として十五緡を、礼として百疋を納め、建仁寺への入寺を果たした。

また『扶桑五山記』の建仁寺の条によれば、

二百七十九世、驢雪鷹灝、八住、山門春（天文五年）沢、江湖佳為、道舊継天、諸山茂彦、

とある。この時の『驢雪和尚建仁寺入寺法語』[*33]が残されている。また驢雪は詩作も長けており『五山文学新集』には「驢雪詩集」が収められている。「幻雲稿」には

驢雪灝公首座越之善応山門
（中略）
公蚤歳学洛寺、中年隠退越州、今年五十歳。

とあり、善応寺で首座を務め、京都で活躍した後、中年には越前に帰ったとある。終焉は不明である。

⑩長松乗彭
長松については七章の「善応寺と祇園社領杉前三ケ村」で述べる。

＊15『心のふる里』郷土誌　東安居郷土誌編集委員会編　第一章　ふる里の歴史　中世　安居の弘祥寺の項
ちなみに『福井県の伝説』の片上村の項には、「妙観山正覚寺（四方谷）。往古は禅宗で妙観寺と号し、開基は了観である。了観の初めの名は成純で、新田氏の一族里見時成の長子である。」（後略）とあり、話が嚙み合わない。

＊16『越前人物志』福田源三郎編　中巻　釋門の部　建仁寺別源の項

＊17『大日本史料』第六編之二十六　貞治三年十月十日の条

＊18『福井県南条郡誌』　臨川書店　下編　処誌　河野村　仏閣の項

＊19『中世禅者の軌跡』　蔭木英雄著　三項　修業時代の項

＊20『五山禅僧伝記集成』玉村竹二著　講談社発行

＊21『戦国大名越前朝倉氏の誕生』福井県立朝倉氏遺跡資料館編集　図版12

＊22『扶桑五山記』玉村竹二校訂　臨川書店発行

＊23『大日本仏教全書』一一〇巻　所収

＊24『蔭涼軒日録索引』蔭木英雄編
では「竺源知裔（善応老人）」とあるが筆者はこの論拠を知らない。
日録での竺源と善応老人との出現（在京を意味する）がほぼ一致しており、同一人との証左ともなろう。
また善応老人とは越前善応寺の出身であることを意味すると考えられるが、竺源は一時、伊予に滞在したことが知られており、念のため伊予の十刹善応寺との関わりもおさえておきたい。伊予善応寺は臨済宗東福寺派であり、宏智派の竺源とは距離があり、この寺の出身を意味するものではないと言える。

＊25『続群書類従』第十三輯上　文筆部

＊26『福井市史』資料編2　六一五　「大乗院寺社雑事記」　明応七年九月十一日の条

＊27『続群書類従』第十三輯上　文筆部

＊28『五山禅僧伝記集成』玉村竹二著　講談社発行

＊29『月舟和尚語録』東大資料編纂所本の複写　建仁寺蔵本写し

＊30『大日本史料』第九編之八　永正十五年九月九日の条

＊31『朝倉の遺宝』福井県立朝倉氏遺跡資料館　編集「禅宗と絵師」の項

＊32『鹿苑日録』第一巻

＊33『驢雪和尚建仁寺入寺法語』　東大資料編纂所本の複写　建仁寺両足院蔵本写し